

平成七年

日 祭 御												日 三 月 一 祭 占 太 社 神 嶽 御 國 藏 武															
元旦	節分	春分	例大祭	流大祭	新秋	日月	元旦	節分	春分	例大祭	流大祭	新秋	日月	元旦	節分	春分	例大祭	流大祭	新秋	日月	元旦	節分	春分	例大祭	流大祭	新秋	日月
一月一日	二月三日	三月八日	五月八日	六月三日	九月九日	十月五日	一月一日	二月三日	三月八日	五月八日	六月三日	九月九日	十月五日	一月一日	二月三日	三月八日	五月八日	六月三日	九月九日	十月五日	一月一日	二月三日	三月八日	五月八日	六月三日	九月九日	十月五日
供次	祭	祭	祭	祭	祭	祭	供次	祭	祭	祭	祭	祭	祭	供次	祭	祭	祭	祭	祭	祭	供次	祭	祭	祭	祭	祭	祭
祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭	祭

す。別名を樺桜(カバザクラ)、上溝(ウワミズザクラ)、金剛桜(コンゴウザクラ)などともいい、また地方によって呼び名が異なっています。一説に白樺の古名であるともいわれています。それはともかく、いまましく詳しく述べれば、ハハカ

の木の皮を燃やして、その火で雄鹿の肩の骨を焼き、その骨にできた割れ目の形を見て吉凶を判断するのです。なお、奈良末期になると、鹿の肩骨に代わって亀の甲を多く使うようになりますが、『釈日本紀』にも記すように、鹿の肩骨を使うのが古い方法だといわれ

ています。ところが、当社の重要なお祭りの一つに毎年正月三日に行われる太占祭があります。祭りの名前からして主祭神の櫛真智命と関わりの深い祭りであることがわかります。一般には公開されておられません。雄鹿の肩骨をハハカの木の皮を炭火にしたもので焼き、その町形(鹿の肩骨にあらわれた割れ目の線)によって、作物の出来具合を判断するのだそうです。前述したように、亀甲より雄鹿の肩骨を用いるのが古く、それを当社で行っているのは、『古事記』以来の占法をそのまま伝えていたのであって、まことに驚嘆に値するものです。

伴信友の『正卜考』

櫛真智命について深く考えた学者の一人に江戸後期の国学者、伴信友(一七七三〜一八四六)がおります。信友は篤胤と同時代に活躍した学者で、二人は親しい友人でした。さきに私は篤胤の説をすぐれているといいましたが、それは信友の説をそのまま受け継いだものなのです。その

ことは篤胤自身も「鹿卜のことは私の友である伴信友がくわしく考察している」と認めております。信友の研究は『正卜考』全三巻にまとめられており、古代の卜占の研究で、今もってこれを越えるものはないといっても過言ではありません。ハハカの木や雄鹿の肩骨などのスケッチなども添えてあって興味深い内容となっています。心を引かれた一つは『万葉集』巻十四の「武蔵野に占へ肩焼き、まさでも告らぬ君が名占に出にけり(武蔵野で鹿の肩骨を焼いて占ったところ、まさしく、口に出さなあなたの名前が、占いに出ましたことよ)」との歌を掲げ、東国の神社の中に、今も鹿占が行われていると記していることです。「占へ肩焼き」とは鹿の肩骨を使った太占であり、これは恐らく、当社の太占祭と関係があるものと思われ

御嶽神社宝物シリーズ4
都指定有形文化財・銅製鰐口

日本風俗史学会 青梅市文化財保護審議会委員 齋藤 慎一

武蔵御嶽神社には明治初年 志者為天長地久御願圓滿 及の廃仏毀釈の折に失われるま 至法界衆生平等利益也 徳治二尺五寸(75cm)の鎌倉時代末 大檀那壬生氏女納之 大工期の釣鐘があった。その銘文 行重 播磨權守利重」とあり、は「敬白奉鑄金峯山槌鐘 右 そのいわれは不明であるが



都指定有形文化財・銅製鰐口-写真は青梅市郷土博物館提供-
上図は側面の上部(両耳の部分)の刻銘。
下図は鼓面。各区が三条の線で区画されている。

『誓詞之鐘』と称したという 華の撞座を鑄出す。(刷物・新編武蔵風土記稿・武蔵名勝図会)。この多摩郡 最古の徳治二年(一三〇七 年)の釣鐘により、鎌倉時代 にすでに、社殿とそれに付属 した建造物である鐘樓が、御 嶽山上に存在していたことが わかる。この釣鐘について、現存最 古の中世の御嶽神社(金峯藏 王権現)の社殿の確実な存在 を証明するのが、建武五年(一 三三五年)三月十一日在銘の 銅製鰐口である。 鑄銅製で、直径34・7cm、 厚さ15・5cmで、重さは8.5kg ある。吊手(耳)は、鉦鼓(ふ せがね形)の古い様式を残し ていて、中ふくらみの鼓面(表 面)である。その鼓面(表面) は外区(幅9.7cm)・内区 (11cm)・撞座区(直径14・ 2cm)に区画される。撞座区 の中心には直径7cmの複弁の やや硬化した図様の八葉の蓮 規模の山上の建造物が確実に